

ORAL INTERPRETATION による英語音声表現習得

- 方法と技術 -

原岡 笙子

神田外語大学

はじめに

外国語の発音習得の際、母音に近い音が習得を容易にするか、新しい音の習得の方が容易であるかは専門家の間でも論議の分れる所であるが (Selinker.1972 Inter language. Kellerman, E. 1980 The empirical evidence for the influence of the L1 in interlanguage)、日本の外国語教育では、母語にない新しい音の習得の方に注目し、母語を外国語に持ち越すための障害の研究が軽視される傾向にあると言える。神山(1995 P.220)は日本人にとって困難なのは染み付いてしまっている日本語の癖による様々な誤りからの脱皮であると述べている。

だが、視点をかえて、外国人に日本語を教える日本語教育の分野でもなく、日本人の外国語習得の分野でもなく、国語教育の中での音声表現能力を養う音声教育が必要であるとの観点で、母語での「朗読」指導の方法と技術を英語音声習得のなかに取り込み、日本語話者の英語音声表現力をコミュニケーション教育との接点にしようとする試論を述べたい。

これまででも話者の心理との関わりがあり、意図する message を正確に相手に伝えるために最も重要な部分は主にイントネーションの働きによるものではないかという仮説に基づいて考察を行って来た。Implied message と Intonation が Communication 能力に大きく関与するとして Intonation 習得指導の方法を探って来たということである。具体的には、ロンドン大学で行っている Intonation Dictation による教授法や、音調による意味の差に集中した表記づけを行いテープに録音し確認するという方法などを通して英語の韻律的特徴を考察した。これは調音音声学 / 音響音声学の理論を音声教育に融合させ、効果的なコミュニケーション能力習得を目指したものである。

しかし、理論はその教授法と技術の開発なしには実践に応用することは困難である。そこで、英語の韻律的特徴を日本語話者に教える際の教授法の一つとして、既習の母音の韻律を英語のそれと平行に習得させる ORAL INTERPRETATION を検討の対象とした。

文法や意味と深く関連するイントネーション、言葉の土台となっている音節に関わるリズムやアクセントなど、文字では伝達されない情報とコミュニケーションとの関わりは、日本語においても、英語においても共通の部分が多いということに着目した、文字として表記されない「韻律」の指導法の開発である。

日本語の「表現読み」は、荒木茂が小学校のレベルで導入している。1970年代に日本のコトバの会・表現読み部会で表現読み理論に基づいて、実際の音声表現訓練を受けた後、小学校での表現読みを導入したという。荒木(1979「表現よみ入門」)によると「公立学校は

俳優や声優を養成するのではないから音声表現指導など必要ないという意見がある」が、言語・国語教育の基本は音声コトバにあり、語り手の思想・人生観が滲み出るものであり、音読するには文章内容がよく理解できていなければならない、音読指導は解釈深めの指導であるとしている。

日本人の外国語習得の、特に音声習得のバリアは音声教育軽視もその一端を負っているのではないかと思われる。21世紀に入り早期外国語教育の重要さが認識され、音声から入る英語教育が公立の小学校に導入されることになった。ますます拡充されて行く可能性のある英語教育は各分野毎の研究を相互に提供することにより、国際化に耐える表現力を養う指導の方法と技術を開発する方向に向かう必要がある。すなわち、音声教育の重要性が考慮されるべきであるとの立場から、国語教育の一環としての音読指導が、英語音声表現習得とどのような関連があるかを考察したい。

これは、母語にない新しい音の習得が外国語習得であるとし、英語の音素、特に分節音素の分析・研究が主流に行われて来たが表現力習得に結びつかない、という日本の英語教育のあり方を問うものでもある。また、日本人の TOEFL の順位が世界の水準から大きく下回っていることと関連があるのではないかという仮説に始まるものでもある。本論は、音素レベルの習得より、超分節音素の習得が話し手の心的態度の表現と深く関わるものとして、コミュニケーションには不可欠な要素であり、その習得指導に Oral Interpretation の方法と技術を導入することを提唱するものである。

日本の音声教育の歴史

荒木(1989 P.19) は過去に黙読が重視されたことを次のように述べている。

大正時代までの読解指導は、「素読み」あるいは「素読」中心の授業で、教師の誦読、れをまねた子供達の模唱、文章の意味内容と、その情感表現に関わりなく、ずらずらと大声を出して、朗々と読みあげるだけの指導が行われました。読本を、ただ大声を張りあげて朗々と音声化するだけ、何回も文章をそらんじて読みかえし、暗唱できるまでに音声化するという読解指導でした。“読解百編、意自ら通ず”の授業方式でした。

このような素読中心で教師はそれに少しばかりの語句注釈を加えるだけの授業でした。文章を詳細に分析し解明することなしに、直感的にパッと理解させる授業方式でした。昭和十年代からは、それに戦意昂揚、日本精神注入の思想教育が解釈学理論と野合した形態で指導されました。

ところが、第二次世界大戦後は、それが逆転して、読解指導は黙読一本という方式に変わりました。…音読が軽視された理由は、次のようなことから考えられます。1.黙読は能率的である 2.日常の言語生活は黙読が中心である。(新聞、小説など) 3.黙読は音読よりも早く読める。音読は呼気のみを利用するが、黙読は呼気と吸気の両方で読めるので、速度が三、四倍も早くなる。情報化時代には、速

く読む能力が必要である。 4. 音読より黙読の方が、理解が深まる。音読は音声に気をとられて、内容がつかみにくい。黙読では意識すべてが内容に注がれ、深く、集中して読み進められる。 5. 黙読は他人の迷惑にならない。黙読ができる能力を促進すべきである。国立国語研究所「言語能力の発達に関する報告」によると、小四の最終段階で黙読の基礎的方法が身につく、音読よりも黙読の方が速くなり、その内容を正確に読み取るようになるという調査が出ている。音読しなければ意味をつかめない段階は速く卒業させて、黙読で意味をつかめる段階に到達させる必要がある。 6. 入試には役に立たない。

国語音声教育の外国語教育への応用

外国語教育に携わっている者は、英語などの TEXT を音読させ、つづいて Comprehension check のために質問をすると、多くの学生がもう一度黙読をして解答を探すという場面に遭遇しているはずである。書き言葉として外国語を教えられた結果であることは明白であるが、母語でさえ「音読より黙読の方が理解が深まる」と思われていることが土台になっている事実が伺える。また、荒木の考察の中に「音読しなければ意味をつかめない段階を早く卒業させて、黙読で意味をつかめる段階に到達させる訓練をする必要がある」とある。このことから、音読による読解は黙読より初歩の段階であるとの見解が伺えるが、それは文章の意味内容と関わりなく、模唱し朗々と読みあげるだけの音読レベルを指していると解釈できる。外国語教育においても、模唱による音読がまず行われ、次いで黙読に入り、文の構造を分析し、和訳をする。その細切れにされた思考の塊、すなわち意味群を日本語の語順につなぎあわせて和訳ができるが、英語の文脈に即した論理が日本語の訳の中に見えないというのが実態である。その場合の模唱による音読は、語レベルの発音の仕方を指導できても、文全体の内容理解と結びつかないため、聞き手には意味不明な、単なる音声表出であり、コミュニケーションと程遠いレベルの音読である。

日本では Speaking 能力を、分節音素の発音の良さと、簡単な会話を表出できることを Competence レベルだと見なす向きがあるが、音声表現は音声技術の観点からでなく、内容理解の総合的表出として評価されるべきである。音読は内容理解の表出であり、音声表現は内容そのものの表出でなければならないという立場に立って、次の小学生の学生指導要領を英語の音声表現習得のプロセスと読み替え、音読を通して総合的な語学力習得の方法として応用することを提案するものである。

新学習指導要領（平成元年三月、文部省告示）では音読の「理解」領域に「音読」（小一～小四）、「表現」領域に「朗読」（小五～）が位置づけられており、「語や文としてのまとまりを考えながら音読する」（小一）、文章の内容を考えながら音読する（小二）、「文の内容が表されるように工夫して音読する」（小三）、「聞き手によく伝わるように音読する」（小四）、「聞き手にも内容が分かるように朗読する」（小五）、「聞き手にも内容がよく

味わえるように朗読する」(小六) となっている。

これは英語音声表現習得法として筆者の提案している Oral Interpretation of Literature と同じ指導法である。これは First Language Acquisition, Second Language Acquisition に関わらず、言葉の本来の姿である音声を、総合的理解の表出として捕らえることが重要であるということに外ならない。

そこで、日本語版で音声解釈表現を行い、読み手の主体的解釈に基づく表出で、Author, Interpreter, Audience の三者を一体化させる指導をし、つぎに英語版で、同じプロセスを踏んで Oral Interpretation を行った。指導のプロセスは以下の通りである。

英語音声表現習得の指導と方法 - 日本語と英語による ORAL INTERPRETATION -

STEP 1. READING COMPREHENSION (黙読)

内容理解：作者の意図・テーマ、作品の要旨・展開、場面描写、人物の性格心理
構文の分析：段落分け、難文・難語の考察
翻訳書の使用容認：学習者自身が、構文の分析に集中して訳した低次の訳による理解より、洗練された翻訳を使用することにより、内容理解に母語の感性を利用する。ただし、複数の翻訳を比較対象し、感性豊かな母語での表現法を観察させる作業を行うことが重要である。

STEP 2. DISCUSSION

音声と内容理解の関連についての話し合い

作品の味わい、色、調子、ニュアンスなどを音声表現と結び付け、話し手の心的態度を聞き手に効果的に伝えるためには何が必要か、どう表現すればよいか等を全員で話し合う。群読(Choral Reading) に対しては、解釈に共通認識を得るまで検討する。単読(Solo Reading) は、読み手の解釈による主体的表出になるが、外国語の場合、訳を誤る場合も多々あるので、全員で読解の作業を行う。

STEP 3. CLARIFICATION (音読)

解釈の検討後、第一段階の音読に入るが、黙読の際読み落としていた内容が浮上し、再度深い読み込みが必要となる。黙読 音読 検討の繰り返しが行われる。「語や文としてのまとまりを考えながら音読する」(小一) は母語での音読の第一歩であるが、英語では Tone unit 毎に pause をいれて、文のまとまりを考えて理解した内容を直ちに音声で示す音読の指導をする。

Brazil(1994)は Tone unit を次のように定義し、文法に相対する“音法”を教える事を提案している。

Tone unit is the basic building block of spoken English. The sounds

that make up a tone unit are usually run together in the way we are accustomed to thinking of the separate sounds of single words as being run together. Instead of thinking of speech as a sequence of 'words' - as we are inclined to do when examining the written language - we can think of it as a sequence of tone units.

この tone unit は Phrasing とも言い換えられるが、文法用語を使用せず Communication の観点から “ Each tone unit is a parcel information which we present to the listener, and the way we arrange information in parcels is important if we are to be readily understood.”と記述している。このアプローチを指導の際に取り込むことが音声教育には必要であると思われる。

この Tone unit 毎の音読は、理解と表現の一体化したものとして考察されるため、音声解釈表現法指導の原点として、この部分の基礎訓練が高度の表現能力の土台になることは、解釈 表記付け 音声表出のプロセスを経て録音されたテープの音読に反映されている。(本論では、指導のプロセスを示す記述は提示されるが、音声到達度の分析は含まれていない。Speaking / Presentation 能力は科学的に測定する体系が作られておらず、実用英語検定試験の一級二次試験(面接試験)でも、Native speaker と None native speaker 二名の試験官による、五段階評価で測定されている。また、TOEFL の試験にも Listening comprehension はあるが、Production の力を測る Speaking test は含まれない)

Pause : ポーズに関しては : 杉藤 (1999 P.141) が、発話の時間、ポーズの時間と場所、息継ぎの有無を宮沢賢治作「ざしき童子のはなし」の朗読をソノグラフで分析し、息継ぎのポーズが生理的なものであると同時に文法的なくぎりであるとの実験結果を述べている。また、「天気予報」の朗読音声の特徴を、発話の時間とポーズとの割合、話の緩急を調べ、文末、句末など、くぎりの重要さによって、ポーズの時間の有無あるいはその長短として表すことが多いとしている。さらに、「日中は」「夜は」「海では」のあとには短いポーズをいれる例が多いが、「が」の後でいれる例は殆どないというデータは、「は」と「が」の文法的な役割の違いを音声的に表現することを示唆している。また、ポーズをいれた箇所について、文末は文法的くぎり、読点の位置が第二のくぎり、そして接続詞の後、この順に短くなっている実験結果は、前のことばと後のことばとの関係が密着しているかどうかを示していると報告している。(杉藤 1999 P.61)

新学習指導要領「文章の内容を考えながら音読する」(小二)、「文章の内容が表されるよ

うに工夫して音読する」(小三)は、イントネーションとの関連になろう。「イントネーション」は言語学・音声学の中で広義・狭義の中で使用されていて多義的であるが、ここでは言語の韻律(Prosody)の要素のひとつであり、超分節音素(Suprasegmental)の現象を指し、内容を表出する際に話し手の心的態度、感情などを表示するものと定義する。談話分析の研究対象の部分を Oral Interpretation に取り込もうとするものである。

井上(1997 P.163)は“イントネーションの社会性”の中で、オーストラリア、アメリカ、日本の各国で新たに広がっているイントネーションの変化に共通のものが見られるとしている。音響・音声としての共通の度合いは明らかではないとしながらも、1) 談話の継続を指示し、2) 話順を確保して相手に割り込ませない、3) 相手の理解度を確認するという機能面で一致していることを Australian Questioning Intonation、アメリカの uptalk、日本の尻上がりイントネーションの例を引いて記述している。イントネーションの理論的可能性か、心理的普遍性かは明らかではないが、共通性があると言う研究成果を土台にし、同じ材料を使用した日本語と英語による音声解釈表現指導の中に応用させたい。また、郡(1997 P.198)は“東京で「ありがとうございました」の「ございました」のアクセントを弱めないで言うと皮肉っぽく聞こえるという指摘がある。(Fujito et al.1979)”という例をだし、詫びや感謝のことばに起こる現象について言及している。これについては、後に述べる「何か用ですか？」を“What do you want?”と下降のイントネーションで表出したために相手に不快感を与えてしまったという実話を筆者の授業で聞き、“大変な衝撃を受け、英語における Intonation の重要性をしみじみと知った。”という大学生の研究報告(P.12)があり、イントネーション指導の重要性と直結するものがある。

Rhythm: Stress-timed rhythm を持つ英語と Syllable-timed rhythm を持つ日本語を平行して比較しながら習得することは困難であるが、母語と英語のリズムを個別に朗読することによって、相違を認識させ、それぞれの特徴をだす方向に指導する。

英語の場合：次のような基本的な現象を認識させることに留まる。

文の強勢：1) 名詞、動詞、形容詞、副詞、指示代名詞、疑問代名詞、間投詞の Content words は文中において第一強勢または第二強勢を受ける。2) 第一強勢を受ける語はただひとつである。3) それは通常、上記の Content words の中で最も文尾に近い位置にある。一つの文には pause があり、文が複数の breath group に分かれる場合は、各々の氣息群の中に第一強勢を受ける語が一つずつある。

2) Content words 以外の助動詞、前置詞などの機能語は通常第一強勢も第二強勢も受けない。

3) 主体表現の多い Oral Interpretation においては、文中のある語・意味群を強調したり、対比する場合は上記の規則と異なる Intensity emphasis や Contrastive stress の現象があることを指摘する。

4) 強強勢が続く場合は、英語のリズムの等間隔性が優先され、中間の語の強勢を弱くして、強弱のリズムを保つ。

5) 強強勢の間に弱強勢があると、複数の弱い音節の場合はそれらは低く、速く、曖昧に発音され、一つの音節しか無い場合は、逆にその音節はゆっくりと明瞭に発音される。

日本語の場合：各音節の長さをほぼ等しくすることによって、リズムが生じるが、声の高さによって作られるアクセントの重要性を意識した朗読をするよう指導する。すなわち、アクセントをどこに置くかによって、言葉の意味が異なってくることを体験させる。谷川俊太郎の詩は音にして初めて分かるリズムがあるため、次のような詩で高低アクセントとの関連で音読させる。

かっぱかっぱらった	河童かっぱらった
かっぱらっぱかっぱらった	河童ラッパかっぱらった
とってちってた	トッテチッテタ(取って散ってた)

両者の比較：日・英語共に、強調を pause で表出することができる。

母音の長さにより、感情表出ができる。これを川島(1986 P.96)は“Time”として、「タイムは音声表現の意味の上で卓立(Prominence)を形成する strong form が作られるとき、その語を発する際に子音、母音を長く引っ張って時間をかけて発音することを言う。e.g. He was so bad[bæd] boy としている。

日本語では強調の音声表現として、杉藤(1999 P.37)が宇野重吉による「オオカミの大しくじり」の朗読を分析している中で、「うまーいもんはないか」などの長音表記の母音を長音にするだけでなく、「うまーいもん」の全体を長く読んでいる。強調表記箇所以外に長音による強調を行い、「むかーし、むかし」と母音を長くのばして、はるか現実から隔たった民話の世界へ、聞き手をひきいれていると記述している。

また、“「山の奥からのそらのそらと、おりて来たわい。」の発音は母音だけでなく、子音も共に長くしています。これは悠然とオオカミを登場させる手法となっています”と述べている。

これらは同じ材料を日・英両語で音読する場合の資料として活用したい。

Pitch: 英語の単語には、各音節の相対的な強勢が示されているが、相対的な高さは決まっていなかったために示されない。これが文レベルでの朗読や談話に使われる場合は、“Rain”
「雨だって？」、「Rain」
「また雨か」のように、話者の断定、疑惑、失望などの心的態度を表すとき文中の各音節に加えられる相対的な高さ、及び変動を、4種類の高さの段階と氣息群(breath group)の末尾音調曲線とをあわせてイントネーションで表出できることを認識させる。Pitch level は簡素に直線で表し、低い方から/1/, /2/, /3/, /4/と高さのレベルのあることを認識させるに留まる。

簡単な例を使い末尾曲線の種類を発音練習させる。例：下降調 $g\bar{o}\searrow$ 上昇調 $g\bar{o}\nearrow$ 下降上昇調 $g\bar{o}\nearrow\searrow$ 平坦調 $g\bar{o}$ さらに多音節語、句などを使い練習する。

杉藤(1997 P.19)は「文の中で、ある単語が強調されるとき、アクセントのある音節は高くまた長く強く際立つが、他の部分は低く抑えられ弱く短い。音の数とは関係なく、このストレスのある高く強く長い部分を核としてリズムが成り立っている。」とまとめている。また、「アクセントによって語音の長さは変化せず、...アクセント、イントネーションが作る声の高さの変化は、ポーズによる区切りと共に、意味上のまとまりを作っている」と記し、リズムがアクセント、イントネーション、ポーズと深く関わり、日本語らしさを作っていることを強調している。英語らしさ(Englishness)をだす要素と共通点があることを認識させて、Oral InterpretationのPresentation(Delivery)に導入したい。

最後に、国語の音声教育の中の「朗読」領域に位置づけられている「聞き手にも内容が分かるように朗読する」(小五)、「聞き手にも内容がよく味わえるように朗読する」(小六)の指導要領は、作者の意図を読み手の解釈による主体的な音声表現で、効果的に聞き手(聴衆)に伝達する事を目標とした Oral Interpretation of Literature の指導要領であると読み替えることができる。

コミュニケーションは two-way の過程であるから、読み手は聞き手を意識し、作者の意図を自己の解釈による音声で表出し、聞き手に伝えなければならない。言い換えれば、聞き手に無関心な自己陶醉の読みでは、コミュニケーションは成り立たない。自己陶醉した結果、自我を前に打ち出す表現過剰の状態では、読み手が伝えようとする適切なメッセージを送ることが出来ない。

CHAROTTE I. LEE (1997)は Interpretation を次のように定義して、聞き手の存在の重要性を述べている。

Interpretation is an art of communicating to an audience a work of literary art in its intellectual, emotional, and aesthetic entirety.

しかし、荒木(1989 P.28)は日本語の音読指導法として、「聞き手を意識から消して、読み手の注意力を文章の意味・論理の世界を鮮明に脳裏に浮かべることに集中」する、聞き手意識ゼロで音声表現する事を推奨している。

BOARDMAN(1952)も作者と読み手の関係を述べ、聞き手を考慮に入れず次のように定義している。

Interpretation, then is the fusing of two distinct personalities and minds the author's and the interpreter's into a synthesized, organic whole.

この定義の違いは音声解釈表現の指導法に大きく関わりを持っているため、もう一度荒木の推奨する指導法を振り返ってみよう。聞き手意識ゼロの境地とは、聞き手意識あり、

聴衆を加えた Presentation がある。後者の場合は 2)~4) のコミュニケーション要素が大きく関与する。本論では、1) の音声表出の指導法とその成果をテープに録音するまでの音声習得の経過を学生の“オーラル インタプリテーション”の Term paper で提示したい。これは、日・英語の比較によるオーラル インタープリテーションに入る前段階であり、日本語による表現訓練を行っていない学習者の独自の習得記録であるが、STEP 1~STEP 5 までの Learning process がよく観察される。このレポートは、Production と同時に Perception 能力の習得も目標にして行った Listening Error Analysis も含まれており、コミュニケーションのための運用能力の自己分析も記録されている。

TERM PAPER FOR ORAL INTERPRETATION

Contents

. Introduction	
A. Definition	< 1 >
B. Purpose	< 2 >
. Chapter 1 Analysis of “ An Eye to the Future ”	< 4 >
1 . ここまでのあらすじと登場人物の紹介	
2 . 今回のスクリプトの人物描写	
3 . セリフに見る感情と音声表現	
4 . スクリプトの解決と実演	
5 . 考察まとめ	
. Chapter 2 Error Analysis of Listening	< 7 >
A. Error Analysis of “ An Eye to the future ” (1)	
1 . 誤りの種類	
2 . 誤りの傾向	
3 . 考察の改善策	
. Summary	< 10 >
. Bibliography	< 10 >

. Introduction

日常生活の中で、人の何気ない言葉に傷つけられたり、心を打たれる事がある。会話、手紙、詩、劇、映画、TVドラマなど、言葉に接する様々な場面の中でそれは起こる。だが、自分が印象に残る言葉でも、他人にはそうでない場合もあるし、同じ言葉でも、それを発する人によって感動したり、しなかったりがある。言葉を生かすか死なすか、いかに人の心に響く言葉を伝えられるかは、結局のところ、話者の表現力にかかっているのではないかと思う。

Oral Interpretation とは、伝えたいメッセージを相手の心に響かせるためにはどう表現したらいいかを吟味し、実際に朗読をする中で、自分の感性や表現力を高めていく学習である。自分の解釈によって、紙に書かれた文章に色づけされ、自分の音声表現次第でそれが生きた言葉になる。生きた言葉は必ず心に訴える。

では、その為にはどうしたらよいか。どうやって解釈をしていけばよいのか。それはその言葉の作者の心情を深く読み取っていく事から始まるのだと私は思う。これは、言語を問わず、読み手として最低限すべきことだろう。だが、その言葉の特徴を活かさなければ十分に相手に伝わらない事、逆にそれを知ってさえいれば何倍も何十倍も生き生きした言葉を伝えられる事を、私はこの授業を通じて会得する事が出来た。

私はこれまで10年近く英語を勉強してきたが、ここまで音声に気を配って英語を聞いたり読んだりしたのは初めてである。この数ヶ月で、音声には以前に比べ遥かに敏感になったと思う。というのも、授業の中で、Intonation によって相手に不快感を与えてしまいかねない例文として、“What do you want?” が取り上げられたとき、大変な衝撃を受けたからである。今まで Intonation は自分の中で、平叙文と疑問文とで区別していたくらいだった。もしかしたら、今まで自分のやってきた英会話の中で、米国人や英国人の人たちに、何度となく失礼なものの言い方をしてしまっていたのではないかという不安に駆られた。英語における Intonation の重要性をしみじみ知った。

アメリカのTVドラマを扱った今回の授業では、映像に助けられながらも、役者のセリフを繰り返し聞く中で、英語 Listening の訓練としても、役者の気持ちを読み取る訓練としても役立った上、実際に役になりきって Presentation をしたことで、自分の解釈をもとに英語の音声でどう表現していけばいいかを学ぶ事が出来た。Intonation をはじめ、Pitch、Stress、Rhythm、Tempo、Pause などに留意し、英語の音声表現をより豊かにしていくために授業で学んできた事の集大成として、このレポートをまとめてみたいと思う。

A. Definition

What is oral Interpretation?

Introduction の中でも、自分の Oral Interpretation に対する見解を少し述べたが、他の文献でも調べてみた。

インターネットでの調査結果では、南青山大学のホームページで次のように解説している。「オーラル・インタープリテーション (Oral Interpretation = 音声解釈表現法) とは、小説、随筆、戯曲、詩、日記、書簡、その他文字で書かれたもの全てに対して、その内容ばかりでなく、書き手の意図・気持ちなどを総合的に理解し、それを言葉の本来の姿である音声として促え直し、自分の声と体を使って、聞き手に伝達する、解釈と表現のスピーチ学習である。オーラル・インタープリテーションは自分自身がこういう意味だからこう読むのだと納得せずで声を出す、言ってみれば、音読の形で解釈を表明する行為である。」

また、Charlotte I. Lee & Timothy Gura (1997) Oral Interpretation によると、“ Interpretation is the art of communicating to an audience a work of literary art in its intellectual, emotional, and aesthetic entirety. ” とあり、下線部 art は ‘ skill in performance ’ であるとも追記している。

これらの解説を参考に、また授業で学んできた事をもとに、自分はこのレポートの中で Oral Interpretation を次のように定義したい。

『TV ドラマの中の英語を通して、役者の意図・気持ちを汲み取りながら自訴の感性を高め、自分の解釈を加え、どうやって音声表現をすれば聞き手の心に響く伝達ができるかを考察する中で、場面や人物の感情にあった効果的な英語の音声表現方法を会得していく学習。』

B. Purpose

< Chapter 1 Analysis of “ An Eye to the Future ” (5)>

上述で定義づけた Oral Interpretation の学習における到達目標である、役者の意図。気持ちを汲み取ること、自分の解釈を加え、どう音声表現すれば聞き手の心に響く伝達ができるかを考察すること、最終的に、場面や人物の感情にあった効果的な英語の音声表現を会得することが、そのまま、まず、Chapter 1 Analysis of “ An Eye to the Future ” の目標になると考える。

< 2 >

スクリプトに対する、自分の解釈を述べる前段階に、このシーンの状況説明と人物描写を自分なりの見解で示した。

Presentation では、Body movement [eye contact, facial expression]を活用して、言葉の表情をつけることが可能だが、一本のカセットテープの中だけでどこまでそれが伝えられるか、表現しきれんかが一番の困難であった。その分、Pitch の幅をきかせたり、Intonation、Fluctuation をつけるなど工夫を懲らしてみた。

< Chapter 2 Error Analysis of Listening >

Error Analysis のまず第一の目標は英語の Listening 及び、Writing における自分の欠点を把握しそこから自分の誤りの傾向を探る事にある。そして第二に、これが最も重要なことであるが、誤りを分析した上で今後の改善策を立てることが必要である。今回は TV ド라마の中の会話を聞き dictation したものの Error Analysis なので、特にこの会話の流れがつかめているか、誤りがコミュニケーションの理解に支障をきたすものではないかに着目する事も大事である。

Dictation することでも Listening の学習に役立つが Dictation したものを分析し見直す事で、自分の日頃意識しない欠点が見え、今後の努力につながっていくことは、大変有意義である。ここで行った Error Analysis を明日からの英語の Listening と Writing の学習に役立てたい。

RECEPTION OFFICE DAY

(冒頭省略)

Kate : Dr. Stiles, I'm Kate Lawrence. I was supposed to play for you yesterday.

Stiles : I recognize you.

Kate : I'm sorry I lost like that. I should have waited and told you why I decided not to play.

Stiles : Yes, you should have.

Kate : You had so many people to hear.....I didn't want to take your time. I looked around... everybody looked so young.....And you...

Stiles : Mrs. Lawrence, a person who wants to can learn from a chimpanzee, if it's a good teacher. Now if you have any doubts about me... believe me, despite my age, I am very good.

Kate : Oh, Lord, I didn't mean that. I know you're good. That was never in question.

Stiles : Then what was?

Kate : Okay... when I heard those children playing... that boy, Larkin.

Stiles : That's interesting. He concertized from the time he was five until he was fourteen. You know, he's twenty-seven now.

Kate : Twenty-seven...

Stiles : He's hardly a boy... At the age of fourteen he collapsed under the pressure. Now, he's ready to start over again. He wants to teach.

(以下省略)

1. ここまでのあらすじと登場人物の紹介

アメリカ、ロザンゼルス郊外の町、Pasadena に住む弁護士 Mr. Lawrence 一家を描いた TV ドラマの第 5 回目。妻で主婦を務める Kate は中年にさしかかり、これからは自分のために生きようと仕事に就くことを試みる。音楽と子供が好きな Kate が、音楽事務所に務める Sandy との相談で考えついた職業は音楽の教師だった。しかし、大学の音楽科を 2 年で卒業した Kate は再び大学で勉強をし、学位を取る事が必要だった。早速 Sandy に Rutledge 大学で教えている Robert Stiles を紹介してもらいピアノのオーディションを受ける事になった。だが、オーディション当日、若者の素晴らしい演奏を聴いた Kate は怖気づいて、受けずに途中で抜け出して帰って来てしまった。

そして翌日、Sandy の事務所にいた Kate は偶然にも Stiles に出くわしてしまったのだった。

2. 今回のスクリプトの人物描写

突然現われた Stiles に動揺した Kate が、少し気まずい面持ちでありながらも、昨日のことを詫びようと、丁寧に改まって話し始める。Stiles に向かって真剣に話す Kate に対して、Stiles はその辺にある本を読みながら、Kate に目をやることなく淡々と冷静に返事をしているだけである。だが、Stiles は途中で抜け出してしまった理由を話し始めた Kate のある言葉に鋭く反応し、一転して剣幕な表情に変わり語調が強くなる。

< 4 >

Kate は、オーディション受験者がみな若者であったこと、そのうえ Stiles も若い教師

であることを言いかけた途端に、Stiles は教師を若さで判断されたと受け取り、厳しい批判をする。Kate は突然の Stiles の反論に対して狼狽し、あわててそんなつもりで言ったのではないと弁解をする。また、Kate がオーディションで聴いた Larkin という少年の事を話題にすると、Stiles は、今度は初め嘲笑し皮肉っぽく言うのであった。Larkin は 27 歳になる立派な青年であり、見た目にはわからない辛い重圧を乗り越えて、本当に教師になろうとしていることを、Stiles は Kate に真剣に諭すように訴える。

3. セリフに見る感情と音声表現

感情的な Kate と理性的な Stiles の 2 人の相反する性格がうまく引き出されているシーンである。特徴として、Kate は気持ちの抑揚がそのまま音声の抑揚になっており、落ち着いて話すところ(前半部分)よりもあわてて弁解するところ(中間部分)のピッチの幅が広いなどが見られる。一方、Stiles は全体的に声のトーンは低く、抑揚も顕著でない。また、クールな態度で話す彼の発音はシャープで、母音が短いため、断定して聴こえる口調が多い。だが、Stiles の口調(語調)は Kate の 'young' という言葉を聞いてから一変する。ビデオの中のこのシーンでは、Stiles は読んでいた本から目を離し、Kate を強い視線で見る。そして、“Mrs. Lawrence” と厳しく強い声で呼びかけ、立ち上がって剣幕な態度でもって批判する。この変化を音声だけでどれだけリアルに表現できるか、そして、その後の二人の会話の表情にどれだけ変化をつけられるかが、今回のスクリプトの見せ場である。

4 . スクリプトの解釈と実演 (録音テープ参照)

“ An eye to the Future ” (5)

RECEPTION OFFICE DAY(冒頭省略)

Kate : Dr. Stiles, I'm Kate Lawrence.

I was supposed to play for you
yesterday.

Stiles : I recognize you.

Kate : I'm sorry I left like that.

I should have waited and told you
why I decided not to play.

Stiles : Yes, you should have.

Kate : You had so many people to

hear..... I didn't want to take your
time./pause

I looked around... everybody
looked so young.....And you...

Stiles : Mrs. Lawrence, a person who

wants to can learn from a

chimpanzee, if it's a good teacher./

《解釈》

落ち着いて、かしまって自己紹介を始めている。人に頼む時の呼びかけとは違い「これから自分の話を聞いてください」とお願いするように呼びかけているので intonation は下がる。昨日のことを謝ろうと反省しているので Pitch がやや低め。

厳しい表情が言葉に表れている。Pitchは低く、母音も短い。Sharp に話している。

申し訳ないという気持ちが全面に表れているので、sorryの母音を長く、Pitchも高く強調されている。

さらにわびるように慌てて話すので Tempoが速い。なぜ受けなかったのかの理由を話すべきだったという Kate のセリフは Why だけが母音も長く Pitchも高く強調されている。

先程と同様、厳しい表情で冷たく返答する Stiles は母音を短く話す、Kate の言葉に対して「本当にそうすべきだ」と言う気持ちをこめて should が強調されている。

なかなか Kate の謝罪に対して心を開いて許してくれなさそうな雰囲気、Stiles になかった、Kate はさらに言い訳を始める。Stiles がどう思っているのかも分からないまま、Kate は理解をしてもらおうと自分の本音をだんだん漏らしていく。その気持ちの高まりが音声では、だんだん高いピッチで話す様になっている。「まわりはみな若い人たちばかりなんだもの。」という本音が young の強調で Stiles に伝わる。

'young'の言葉に鋭く反応し、Kate の'you'の言葉で我慢できずにいられなくなった Stiles が爆発する。先程までとは一変し、厳しく、強く、大きな声で批判をし始める。自分の事を若さで判断されたことに対する怒りと反論を

Now if you have any doubts about

me... believe me, despite my

age, I am very good.

Kate : Oh, Lord, I didn't mean that, I

know you're good.

That was never in question.

Stiles : Then what was?

Kate : Okay... when I heard those

children playing... that boy,

Larkin.

Stiles : That's interesting.

He concertized from the time he

was five until he was fourteen.

You know, he's twenty-seven now.

Kate : Twenty-seven... ↗

Stiles : He's hardly a boy... At the age of

fourteen he collapsed under the

音声では文末の語尾の母音を長く強調することで表している。

Kate は突然の Stiles の厳しい批判に狼狽しているので、その様子が tempo の速さと pitch の高さ、文末語尾の母音の強調に表れている。

「何がそれじゃあ問題なんだ」とまだ怒り、興奮が冷めぬ様子で文末の was が強調されている。真剣 Kate に聞いている。

あまりの Stiles の憤りに圧倒された Kate は、ちょっと押され気味に Okay の返事をする。暗い表情がピッチの低さに表れている。

Larkin のことを聞いた Stiles は嘲笑して言う。Kate が boy と Larkin のことを言ったことに対して、そうではないことを皮肉っぽく言っている。

少し驚いているので語尾を少しだけ上げている。

さらに、「全く boy だなんて何も知らずにいわないでくれ」と言わんばかりに、諭す様に言う。Larkin が深刻な問題を抱えて、それを乗り越えてここまでやってきたことを Kate に教えようと、真剣に言葉をかみしめるように

pressure.

話している。

Now, he's ready to start over again.

He wants to teach.

5. 考察とまとめ

Pitch や Stress、Intonation だけでは、表しきれない細かいニュアンス（例えば Stiles が嘲笑して言う所や、Kate が懸命に自分の発言を弁解する所）を表すのに、どう感情移入すればいいかが難しかった。

Kate も Stiles も、特に主張したい所は、文末の語尾を強調している。また、特に Kate の感情の盛り上がりでは、Pitch の幅を広げたり、声の大きさを強めていくことで表した。一方 Stiles も、後半に感情の盛り上がりが出てくるが、よりアクセントを強めていったり、同じく声の大きさを強めることで表した。

評価 *excellent*

_____を解釈（感情・心理面の）の部分に、_____を韻律的特徴の部分に記入してみた。短い材料の中に13箇所の考察があり、_____と_____、の関連が明瞭に表示されている事から、オーラル・インタープリテーションの理解度の深さが伺えるすばらしい分析である。 原岡

.Chapter 2 Error Analysis of Listening

A. Error Analysis of “An Eye to the Future” (1)

1. 誤りの種類（回数） p.29 参照

< 文法面 >

- ・前置詞（1）
- ・冠詞（3）
- ・接続詞（2）
- ・所有格の語尾（1）

< 7 >

- ・動詞 (3)
- ・接尾辞 -ing (1)
- ・短縮形 'll (1)

< 音声面 >

- ・比較的長文で速く読まれる文 (1)
- ・連文の多い文 (2)
- ・弱く読まれる機能語 (6)
- ・既知の単語で聞き取れなかった語 (3)
- ・未知の単語で聞き取れなかった語 (2)
- ・品詞に関係なく文中で弱く読まれる語 (3)
- ・語尾 -ing (3)
- ・ない音が入って聞こえたために誤った語 (5)

2. 誤りの傾向

* 全体的に見て、誤りは多岐にわたっている。

* ピッチの高い語や強勢が特に置かれる語は聞き取れるが機能語などの弱強勢の置かれる語は欠落したり、間違える傾向がある。

* ”Butterflies?” の単語は知っているのに、なんとやっているのか分からなかったのは、口語的な語法を知らなかった (知識不足な) ことが推測すらできなかった一因になっているかもしれない。

* 知らない単語 (bevy, squelch) はまず聞き取れないし、書き取れない。

3. 考察・改善策

dictation をしている間は音声に集中していて、自分の聞こえたように書き取るので精一杯になっているため、後で書いた文章を見ると、文脈に沿わない、意味の通じない文や、文法的に間違いだらけの文が多かった。(例えば、That's Italian standable(entirely understandable). ??" "You don't have some breakfast." 朝食の用意をしている Kate が言うはずがない！) 書き取りながら、文脈にあっているか、意味が通じるか、文法的に誤りはないかを確認められる余裕を持って、考えながら dictation ができるようにしたい。

B. Error Analysis of “ An Eye to the Future” (2)

1. 誤りの種類 (回数)

< 文法面 >

- ・前置詞 (2)

- ・冠詞 (2)
- ・接続詞 (1)
- ・動詞 (4)
- ・助動詞 (3)
- ・副詞 (1)
- ・短縮形 (2)
- ・時制 (6)
- ・複文 (3)

< 音声面 >

- ・文頭の語の欠落 (2)
- ・比較的長文で速く読まれる文 (3)
- ・弱く読まれる機能語 (4)
- ・品詞に関係なく文中で弱く速く読まれる語 (5)
- ・語尾 -ed (2)
- ・[r]と[l]の聞き分けができなくて誤った語 (1)
- ・[n]と[m]の聞き分けができなくて誤った語 (1)

< その他 >

- ・固定観念にとらわれて誤った語 (2)

2. 誤りの傾向

- * まだ全体的に、弱く速く読まれる長い文章を聞き取り、書き取る事ができない。
- * 今回は文法面では時制の誤りがダントツで多かった。現在形と過去形の誤りが多い。音声面でも過去時制-ed の欠落が 2 回みられる。
- * 前回にあまり見られなかった発音のミスがある。自分自身苦手としていている発音、[r]と[l]の区別は、やはり聞き取りからしてできていないのだということがわかった。
- * 複文になっていて、一語一語の長さが短く 3 , 4 語ひとまとまりでくっついて聞こえる所があり、速くて全く聞き取れなかった。

3. 考察・改善策

1 回目比べて、誤りの量は変化がなく、増えも減りもしていないのだが、誤りの質に少しの変化が見られる。全く文脈にあわない、意味不明な文を書くミスはなくなった。多少、会話の流れ、意味の流れを捉えながら、dictation ができるようになってきたと思う。だがひとつ、機能語はともかく、内容語になる(コミュニケーションに必要な)動詞など

は早く完璧に聞き取れるようにしたいと思う。

冠詞、前置詞の誤りが減らないのは、普段自分で英文を書くときにも、感覚任せで冠詞、前置詞を使い、そのまま用法を曖昧にしているからだと思う。特に冠詞は英作文で抜かしがちなので、今後適切に使えるよう、知識を確かにおきたい。

.Summary

英語コミュニケーションの中で、Intonation は気持ち、感情を表す要になっていると思った。そして、その感情を表現するためには、深い読みと、その人物になりきるつもりで役づくりをしていくことが必要であると思った。

そのために、これまで英語の特性 (Pitch, Stress, Rhythm, Pause など) と意味との関係を学んできたが、これからの映画鑑賞(洋画)や洋書の朗読にこのことを活かして、より深く英語を味わって読んでいきたいと思う。

.Bibliography

テキスト：放送大学教材『英語 』（放送大学教育振興会、1989年4月発行）

インターネット：南山大学ホームページ What's Oral Interpretation?

(<http://www.ic.nanzan-u.ac.jp/NANTAN/eigoka/oraltoha.html>)

洋書：Charlotte I. Lee & Timothy Gura(1997). Oral Interpretation

Boston, New York: Houghton Mifflin Company.

日本語と英語による ORAL INTERPRETATION 材料の選択

For Solo Reading

星野富弘の短い詩を個人に選択させる。 作者の背景についての調査 多くの詩の中から独自に選択した詩の解釈の発表 音読 共同討論 再音読 仲間のコメント 指導者のコメント 再び音読音声についての問題点 仲間による矯正 指導者による矯正 再び音読

この繰り返しは小学生の学習指導要領にある「理解の領域」と「朗読の領域」に位置づけられている活動と同じである。高等教育の場では、自己による選択によって生じる責任感のため、解釈の相違についての討論に熱が入る。日本語版終了の後、同じ過程を経て、英語版に入る。母語での理解が困難であった箇所が英語で明解になる。それが本人の Listening Error Analysis で問題になっている箇所であったりすると、新しい発見に刺激され討論が佳境に入って行く。浮上した問題に伴って音声表現を変更し、内容理解 段落の意味 発音矯正 イントネーションの再考察と討論は進行する。特に日本語の解釈には母語であるため種々の解釈が出て来る。自由な発想を奨励すると、解釈のみでなく、アクセントの位置の違いで意味の相違が出る箇所などの指摘に移り、多くの発言が見られる。次に、子のような観点から、材料の選択に成功した数編を上げておく。作品は分かりやすいものから、徐々に難易度をあげていくが、英文和訳に時間をかけず、感覚的な、主観的な部分に十分な時間をかける思考の発表の場とすることを心がけることが重要である。

1) 山に行こう そして
あなたの造られた風景を
見てみよう

I'm going to go
to look at the mountain scenery
made by you, God.

花のまわりに
囲いがあるだろうか
崖の上に 柵があるだろうか

Are there barriers, I wonder,
set up around the flowers?

Are there any walls
Surrounding the tops of cliffs?

小さな心にさえ
囲いを作っている私

It is I myself
who have set up this high fence
all round even my own small heart

星野富弘 『鈴の鳴る道』(1986) 偕生社

"ROAD OF THE TINKLING BELL"
TRANSLATED BY KYOKO & GAVIN
BANTOCK

2) ひととは空に向かって寝る
寂しくて 空に向かい
疲れきって 空に向かい
勝利して空に向かう

Human being sleeps on their backs
facing the sky
facing the sky with sorrow
facing the sky with weariness
facing the sky with victory

病気の時も
1日を終えて床につく時も
あなたがひとを無限の空に向けるのは
永遠をみつめよと
いっているのでしょうか
ひとは
空に向かって寝る

When we are ill
When we go to bed at the end of day
God makes us turn our face up
towards the infinite sky
God, are you telling us
to gaze at eternity
Human being sleep on their backs
facing the sky

星野富弘 『風の旅』(1982) 立風書房

“JOURNEY OF THE WIND”
TRANSLATED BY KYOKO & GAVIN
BANTOCK

For Choral Reading

群読は複数の人数で行う読みであるが、Presentation に至るまでは Solo と同じ過程を踏む。違いは、討論の結果に一致をみななければならないこと、共同作業を通じて協力精神の育成という副産物がつくなどであろう。材料選択には、音の効果の含まれた詩などを選ぶような配慮が必要である。Edgar Allan Poe の “The Raven” “The Bells”、Rudyard Kipling の “Boots”などが文学教育にもなり、群読に適した材料である。

詩のほかに ORAL INTERPRETATION OF LITERATURE は劇、散文の音読による音声解釈表現の習得を目指すものである。難易度の問題を念頭に置き材料の選択を行えば、全てのレベルで取りいれられて音声教育を深められる分野である。

まとめ

日本語と英語による Oral Interpretation of Literature の指導を通して、1) Technical level 2) Semantic level 3) Effective level の総合的な表現習得法を提案してきたが、これは1) 発話、2) 伝達、3) 効果の一貫したコミュニケーション教育でもあり、音声学の側面から見ると、話し手の立場から 1) Articulatory phonetic、話し手と聞き手の立場から 2) Auditory phonetic、聞き手の立場から 3) Perceptual/Auditory phonetic の総合的な音声学教育でもある。1) 調音などの技術面の正確さの習得、2) 韻律により、ある文脈の中で、思考や知識などの客観的情報や、感情などの主観的情報を伝達する Discourse Competence の習得、3) Rhythm, pitch, Intonation などの韻律要素が聞き手に効果的に伝えられ、的確な言い方で聞き手に伝達され Sociolinguistic Competence の習得と読み替えができるコミュニケーションと音声学の融合である。学習過程では、Strategic competence をも習得でき、母語から外国語の音声学習得に入ることにより高度な、総合的な Communicative Competence 習得可能な Oral Interpretation を通して音声学教育を推奨するものである。

NHK の BS フォーム「世界経済会議 2000 年」などメディアの中でも「国際化とは？」という繰り返し取り上げられているテーマの中で“ コミュニケーション能力 ”、“ 言語使用能力 ” が問われている時代の要求に応えるために、試行錯誤しつつも早期の音声学教育の指導法の開発が望まれる。

参考文献

- 荒木茂 (1989) 「音声学指導の方法と技術」一光社
- 井上忠雄 (1997) 「イントネーションの社会性」「アクセント・イントネーション・リズムとポーズ」日本語音声[2]
- 神山孝雄 (1995) 『日欧比較音声学入門』鳳書房
- 郡史郎 (1997) 「日本語イントネーション - 型と機能 - 「アクセント・イントネーション・リズムとポーズ」日本語音声[2]
- 川島虎秀・Josef A. Wanger: (1986) The Bases of Oral Interpretation スピーチコミュニケーションシリーズ英語作品音声表現の基本と実際 三修社
- 杉藤美代子 (1997) 「話し言葉のアクセント；イントネーション；リズムとポーズ」「アクセント・イントネーション・リズムとポーズ」日本語音声[2]
- (1999) 改訂版：声に出して読もう！ - 朗読を科学する - 明治書院

星野富弘 (1982) 「風の旅」 “ Journey of the wind ” Translated by KYOKO & GABIN
BATTOCK

Brazil , David(1994) Pronunciation for Advanced Learners of English Cambridge
University Press

Lee, Charlotte I. & Timothy Gura (1997) Oral Interpretation Boston, New York :
Houghton Mifflin Company